



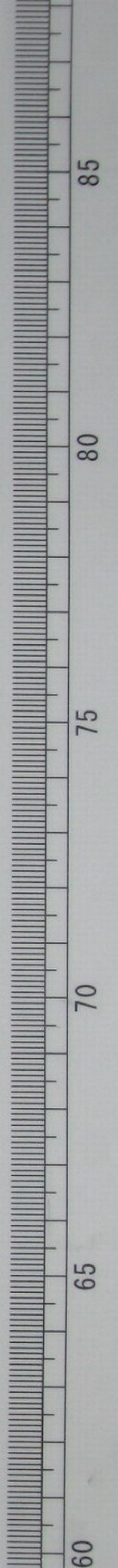
日本かい日奉人 大い五年 十月十五日  
百一頁 百三頁

国立国会図書館

檀畫たんがに非ず檀畫たんがなり

漆山天章

酒井好吉堂の発行雑誌「浮世繪」第拾六號掲  
載、山中嵐光氏の「檀畫」に就ての一章を讀ん  
で、僕の考と餘りに懸隔して居るので、他人の説  
を辯駁するやうに論じたい。さきよ、他人の説  
ない事、檀畫に就いて疑問がある。か  
かうには廣く世間にはこんな分りきつた事を、  
どうのどうの考やかましく言つて居るの、さうなら  
ば僕の考、否思入人で居る事を参考する  
に述べて、悪し者(問答)つたら、ははれ者  
にならうかと思ふ。僕のは實は考へたものと  
何んとか、ソレもなやま、し、ものではない、僕け





(2)

卒直に單に見た儘を初めから擅畫と讀んで、  
それが先入主となつて、擅畫などいはれ、  
をいふ異様に感ずるつてある。

山申氏は、雪坑齋に就いては、『難波丸網目』  
を引いて云ふ爲せられて居るが、實は僕が『難波  
丸網目』の署名は注意して見なかつたが、  
其後寶曆四年の『繪本武者兵林』にも、  
同八年の『繪本玉濃池』にも、明和元年  
の『繪本草錦』にも、同二年の『繪本  
續摺草』にも、擅畫と手ハシに書いて  
あるではないか、今僕の千元にある『繪本  
玉濃池』を見ても、擅畫浪華處士北尾  
雪坑齋辰宣、又『繪本草錦』には、  
擅畫浪花雪坑齋北尾辰宣と署名して

国立国会図書館

(日本標準規格B列5判)

註署名してとば書いて  
たいて



ある。『難波丸 綱目』に檀畫とあらは、それは、  
 筆耕者の誤りかたなり。又重政に  
 孰いては、博物館所藏の渡舟の圖と、書物  
 にては、孔子一世大聖畫傳を引いて居ら  
 ざるが、なるほど重政には、往に檀畫云々と署  
 名したものがたいては、たゞ第一彼の有名な京傳  
 の『四季交加』には、檀畫北尾紅翠、齋  
 と署名して居る。又天明二年放の『繪存八  
 字』に、寛政三年放の『繪存』に、檀畫草  
 づれも檀畫とあると見え、僕の繪存  
 目錄にもさうおつ居るが、併しそれは、水  
 の檀画あやまりて、牛ハニにして檀畫とあ  
 るべきである。又キ元にある『歴代武將  
 通鑑』を見るに、矢張檀畫東都、嶺山嶽



(4)

良蹊樵父北尾紅翠齋圖とキハシに  
 檀と書いてある。其他明和五年版の『繪本  
 甘露鹽草』及び『カバミ草』、天明元年の『俳  
 諧名知折』、つれも檀畫とあつたといふ  
 二れ又僕の繪本目録にはキハシに書  
 ある。しかし何存にかうあるアあると  
 タリサかなんといつたところ、畢竟音  
 孟子に所謂五十歩ある百歩の水懸論で、それ  
 はどうでもよいといつて、唯友に論ずべきは、  
 檀畫であるか檀画であるかの論であ  
 る。檀畫とあつたから、檀は喬木科に屬して  
 和名マユミ、云々など、明外漢の僕などに  
 齒も立ぬ専門の植物學子などを引合に出さ  
 水では重政は東都嶺山獄良蹊樵父と

国立国会図書館



署して居るから、多分上野の山に入つては木樵り  
 して居つたであらうなど、正直に請取らぬは  
 ならぬが、叡山獄民踪とあるから、今の上  
 根岸あたりには住居して居たらう位に、ザット考  
 へて見れば論法によつて、彩色摺の繪本に於ける  
 でも檀畫とあるは、或はマユミ説もさうなる  
 つかれり説かも知れないが、どうも此の論に  
 左祖とあはけりより外はない。又支那の檀  
 郎説、これも僕が往年支那に遊んで  
 見たが、僅に半年、天津と北京に居た  
 けてあるからかして遺憾ながら遂に  
 檀郎檀郎畫などという詞は耳に入ら  
 ずなかつた。このマユミ説を提出す位ならは、  
 『浮世繪』記者はなせ『丹鉛總錄』所載の

国立国会図書館



(6)

明楊慎論畫家檀色檀色、持去さなかつたら  
 う可可、卅鉅總錄卅鉅總錄、街所藏街所藏、なけれは、可可、仰  
 文齋書畫譜文齋書畫譜、卷十四卷十四、載せてありから  
 御隨御隨、なさい、二水二水、又御所共藏御所共藏、てなけれは、  
 敵敵、糧食糧食、を、齋齋、すす、やうな、も、ん、た、が、心、交、に、僕  
 一流一流、の、句、讀、由、點、を、附、して、其、一、章、を、掲、げ、て、  
 見、よ、う。

畫家七十二色、有檀色、淺緒所合、  
 古詩所謂、檀畫、芬枝、而婦也、  
 暈眉色似之、唐人詩詞多用之、試與手  
 某略、徐疑宮中曲云、檀檀、壯、惟、約、歎  
 條、雨、段、也、間、詞、云、拈、人、勻、檀、注、又、銅、昏、檀  
 粉、淚、縱、橫、又、詳、明、留、檀、印、齒、痕、香、  
 又、斜、分、八、字、淺、檀、紙、是、也、又、云、卓、士、曉

→ 齋

国立国会図書館

比月



右

春醲美小檀。則言酒色似檀色。  
 伊予孟昌黃四用茶詩。檀點佳人嗜異香。  
 杜衍雨中。荷花詩。檀粉不勻香汗濕。  
 則又指花似檀也。  
 の如く可浮世繪記者の味方にとつて有益な、  
 鬼に用檀畫といふ。熟語が支那には古く  
 から存在している。しかるに僕はこの人熟語  
 位は味方に取りし楠の泣男ほごにも田は  
 いかから、いつそ向かひまはして置いて、僕  
 檀畫に就ては人に檀畫とはほい、ま  
 なる畫といふ意である。即ち即ち  
 即ち法に依るぬ我儘勝手な畫といふ意  
 である。たゞそなたも書いぬたかといふと、  
 當時様によつて胡甚盛七畫し狩野の末派も、



(5)

家柄とあって、世間から真の畫家とやうに認  
 められ居るに對して、浮世繪師の習坑  
 齋や重政は、自ら謙辭して畫法も何れ  
 にも知らぬぬ、擅次心なま畫工といふ意を  
 以て著したるのである。それか、不思議に習  
 坑齋といひ、重政といひ、此の限りの者  
 かり、錦畫と肉筆は此の限りの者、  
 暑く居るのは珍ら、が、習坑齋がはし  
 めてやつたのを、重政が門人と、いふわけも  
 たらう、それが、鬼に角、真似て見たのであ  
 らう、木へんに書いたかも知れぬ、  
 或は、耕者たごに、誤まらぬかも知れぬ、  
 鬼に角、擅畫であるといふ事は、山中

原文のまま

国立国会図書館



姓に山嵐を號とするやうな、  
 顔に山嵐を號とするやうな、  
 名前の附くへき、  
 てもたない、  
 仲好の勝川春章が、  
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
 花には、  
 爾春草と、  
 生も矢張り、  
 意で、  
 重政と、  
 合作、  
 仲好、



のを見て、己も一ツやれを、真似て、同字を付  
 面、向く、た、い、から、何、が、變、つ、た、ほ、し、い、ま、ま、と  
 讀、尤、字、を、見、付、け、よ、う、と、丁、度、天、明、三、年  
 頃、に、未、来、に、皆、川、漢、虎、の、可、と、世、字、解、に  
 の、ホ、レ、イ、マ、マ、の、部、を、見、よ、と、初、め、に、放、の、字、  
 が、あ、り、次、に、擲、の、字、が、あ、り、其、の、次、に、紙、の、  
 字、が、あ、つ、た、か、ら、此、の、縦、の、字、が、よ、か、ら、う、  
 と、縦、書、の、生、と、直、ぐ、用、み、た、の、て、あ、る、山、  
 中、山、尾、光、君、以、下、如、何、と、な、す、此、の、説、り  
 何、の、存、に、申、出、つ、て、尿、の、た、と、野、草、な、筈、問、  
 は、す、べ、か、ら、ず、そ、ん、な、事、は、可、何、文、解、  
 書、畫、畫、譜、正、に、た、つ、て、出、て、尿、は、古、が、無、し、  
 又、皆、川、漢、虎、の、可、と、世、字、解、説、も、請、  
 在、未、来、也、が、者、章、が、第、一、に、擲、書、

国立国会図書館



(4)

の説明を聞かされた。その説明は、  
 親する事は、何事か、  
 来た事は、前世の事か、  
 さいは、いふ重政と、  
 透は、聴いた。透聴といふが、  
 いが、先づサ。大正五年九月三日稿

国立国会図書館



